

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

菅孝行の論文は二つの問題設定からなる。ひとつは「差別を克服する人権思想、社会的平等の構想はいかにして可能か」という問題であり、もうひとつは「差別からの解放と階級闘争はどのように結合されるべきなのか、結合しうるか」である。以下では、前者だけを取り上げ、後者には論及しない。^a

前者については、彼はつぎのように論じている。人間が人間であることの根拠を、その共通性や均質性の側面に求め、「人間なるもの」の尊厳とか「人間性一般」の価値を説き、個別の差異の権利づけを行わない人間観によつては差別は克服されない。そのような人権論は差異の側面がどんなに抑圧されても人権が侵害されたと考えないし、人権を尊重されなくてもよい例外者を無数につくりだすことを妨げない。

差別を許さない人権論は、これと正反対の立場に立脚する。人権の尊重を個の尊厳に置く立場である。個が個である所以を人間性一般の中に求めるることはできない。個を個たらしめるのは、個Aと個Bの差異である。相互に差異として関係する個を権利づける人権論こそが、差別の根拠を否定する。

尊重され権利づけられなければならないのは普遍的人間性一般でも、多数者の共通性でもなく、差異の固有性である。差別の論理を根底から否認する人権論とは、「差異の権利としての人権」を根底にすえたものでなければならない。以上がその要旨である。A

¹ 私の批判の第一点は、「差異」と「同一性」とは認識論的には相互に前提しあつていて、菅の論述のように、「人間なるもの」の範疇抜きに「個」としての人間を認識することはできない、ということであった。

人間個々人の差異の認知は、個体Aと個体Bとともに「人間なるもの」という同一のカテゴリーに属するという前提のもとで成立する。その前提がなくとも、たとえば □①□ と □②□ との差異は認知できるが、それはまた別のカテゴリー関係設定において意味あるものとして意識される。両者を関係づける同一性の枠をすべて否定すれば、のこるのは完全な相互無関係性となり、差異という観念そのものが成立しない。同一性の外部では、差異は非同一性という純粹な否定性であり、無規定性である。

そうとすれば「人間なるもの」とか「人間性」といったカテゴリーそのものを拒否するのではなく、そのカテゴリーに特定の内容をあたえる社会意識とその社会意識を根拠にしてつくりあげられる規範や権力へ眼を向ける、という議論の仕

(注) 菅孝行：評論家、劇作家（一九三九年）。

方になるだろう。つまり、「人間なるもの」のパラダイムが、男性、健常者、文明人といった特殊な一部分の普遍化であること、そして差別²・排除をこうむつた他の諸部分の側から光を当てられるまで、「日常生活の宗教」としてそのことは疑われないというあり方へ眼を向ける必要があるのである。オーストラリアの先住民たちは、「人間なるもの」のカテゴリーからあらかじめ排除されたので、白人移住者の狩猟の対象や毒殺の対象とされた。あたかも「雑草」が観ショウ用の草木から差別されて、除草剤で除去されるように。

なにを同一とみなし、なにを差異とみなすかという「みなし認識」は、カテゴリー化する作用である。そのカテゴリー化作用は、たえず価値判断と関係しあつて、そこに差別へのきつかけがすでにらまれているのである。

『人種的差別と偏見』（岩波新書、一九七二年）を書いた新保満³^{〔注〕新保満：社会学者、カナダ研究者（一九三一年～）。}は、「差別」をうむ心理的原因としての「偏見」を「あるカテゴリーに関する、誤りを含みかつ弾力性の乏しい一般化」であるとのべている。しかし、と新保は言い足す。人が社会生活をいとなむときにカテゴリーをつくつたり、あてはめたりする思考をしないことはできない。「教員」「牧師」「主婦」「企業戦士」「ホモセクシュアル」など、私たちは他者とかかわりをむすぶとき、あるいは認識するとき、カテゴリーカルな判断から出発することがしばしばある。ことに第二次の「情報」への依存度が高い今日の社会ではその頻度が高まる。カテゴリーカルな判断には、すでに偏見の可能性または現実性が内蔵されているから、吟ミ抜きにその判断にしたがう行動は差別的になりやすい。B

菅孝行の意図は、近代西欧の、とりわけ啓蒙主義のヒューマニズムと理性にもとづく人権思想の限界を指摘し、その理論枠組における「人間」および「人間性」のカテゴリーが女性や障害者、精神病者などのカテゴリーを別枠にし、そこに属する諸個人を実質的に否認・^b黙殺・排除した一般化である、と批判するところにあるように読みとれる。

もし彼の意図をそう理解してよければ、「差異の権利」論という抽象的で差別の社会的装置批判から逸れてしまふ方向へ進むのではなく、「同一性と差異」というカテゴリー設定そのものが、差別者・被差別者関係における差別者の意識と論理のワナであることへの批判へと進むべきではなかつたか。

「差異の権利としての平等」論の方向へ進むと、たとえば各人の「能力」差というところでたちまちひつかかる。「能力」の差のあるがままを権利として、相互に主張しあいその自由な発^④キを保証しあうことを、能力についての差異の権利とみなすならば、それがもたらす社会的結果は、運動能力とか言語能力とかといったカテゴリーカルに切り取られた「能力」ごとに劣る者を差別し排除するシステムの生産である。したがつて、「差異の固有性」一般を権利とすることは、反差別とい

〔注〕新保満：社会学者、カナダ研究者（一九三一年～）。

う目的を裏切ることになるだろう。「結果の平等」論で補正してもパラダイムそのものが差別産出的であることをかえることにはならない。

「同一性と差異」というカテゴリーで考えること自体が、差別者・被差別者関係において、差別者側が仕掛けた自己」と他者との非対称の認識装置であると、江原由美子はするどく指摘している(『女性解放という思想』、勁草書房、一九八五年)。彼女はいう。「差異」は「差別」の根拠ではなく、「差異」を論ずるよう仕組んでいた仕掛けこそが「差別の論理」なのだ、と。

差別は被差別者の特性や固有性とはほとんど無関係である。つまり、その標識は恣意的にえらばれる。差異をあげてその価値づけを理由にすることは、「差別」の仕組みそのものをみえなくさせるための差別者側のワナである。「差別」の本質は、特定のカテゴリーの人びとの「排除」にあり、「排除」の目的にかなえばその標識はなんでもよいのである。女性が男性から差別されるのは、女性としてのあれこれの特性によるのではなくて、男性でないからである。同一性に対して非同一性のカテゴリーに位置づけるのである。

この場合、重要なのは差別する側がカテゴリーを設け、それに命名する権利を独占しているという非対称の関係である。差別する者と差別される者との関係は、名づける者と名づけられる者、区分する者と区分される者という関係である。「差別の論理」を支えるこの関係は完全に一方的であるから、区分の特徴は恣意的であつて差しつかえない。また、差別する側は自分については自明であるから名づける必要がない。すなわち、差別者のカテゴリーは I であり、被差別者のそれは II である。そのさい、あたかも被差別者側の「実在的な差異」が III の根拠であるかのように関係を指定するのである。^(注)ここからあれこれの差別がなぜ不当なのかを理由づけるギョ^ヨ証責任を被差別者側に押しつけるといふ転倒がおこる。この関係そのものの不正当性と非対称性を暴露し、問題はカテゴリー権の奪還にあることをあきらかにすることが「反差別」の論理である。C

私自身の考え方をまじえたところがあるが、江原由美子の主張を要約すると右のようである。

この認識は、私も具体例をあげて共有することができる。アイヌ民族は、差別の関係に置かることによって、IV であり自称であつたアイヌ=人間という呼称を、集団を特定化する差異の徵しとして V 化された。その集団を排除した側は、それに対して、被差別集団から対称性の関係を要求され、自分たちの集団の自称をもとめられたと、たちまち自分たちについての適切な呼称がないことに気づく。あるアイヌがたずねた。「私はアイヌですが、あなた

(注) 江原由美子：社会学者（一九五二年）。

は何者ですか。」ふつうは「日本人です」と答えるだろう。

「私も日本国籍を持つてるので日本国民です。そしてアイヌです。あなたのいう日本人と日本国民とはおなじではないですね。そういう立場であなた自身を見たら、あなたは何者ですか。」

「関東人です」とか「北海道人です」とかいうのは、アイヌという集団的アイデンティティと同位のレベルの呼称ではない。要するに多数者の自己定義は「差異ある者（アイヌ）を除いたあと、それ以外のわれわれみんな」というかたちをとっているのである。

これは特殊に「日本人」にかぎられず、差別する側に普遍的な「私＝私」という自己同一性を結果する権力構造であることを、私は、アオテアロア（ニュージーランド）でのマオリ民族と白人（マオリ語でパケハ）の関係での白人の自己認識構造として、関係者からきいた。⁴

この被差別の被命名、被分類性を逆手にとり、その構造を痛快に暴露したものに、宮迫千鶴の『ママハハ物語』（思潮社、一九八七年）がある。「ママハハ」というカテゴリーづけは、一般に「冷酷で非情かつヒステリカルであり」、「継子」（まきこ）を虐げる意地の悪い女ということになつていて。彼女が再婚的「同居」を始めたとき、その相手には息子がいた。その男子にとつて彼女は「ママハハ」と呼ばれる存在になる関係に入つた。その息子Q太郎が「なんて呼べばいいの？」ときくので、「ママハハってのはどう」と答える。

しかし、いつたん使つてみたQ太郎は、友だちが妙に暗くなつたり、同情してやりにくいという。そして、「ママハハ」に代るべき言葉が、日本語はない。せいぜい「新しいオフクロ」「義母」あたりだということに気づく。そこから始まつて、彼女は差別のカテゴリーのマイナスの符号におじけずに、自分で命名したあたらしいカテゴリーとして使うことによつて非対称の関係をふみこえようとする。そういう経験と思考から、差別の無根拠性に対処する方法を、彼女はつぎのようにならべている。

「私が「在日韓国人」という問題をわが身のアナロジーとして意識化したのは、私自身が女としてこの社会に参加し、そのことによつて女性差別社会のこれまた無根拠性に衝突したことによる。差別に直面した時、私たちのとるべき方法は、屈辱的同化か、自らを異人化することによって新しいカテゴリー権利を獲得するしかない。」（宮迫千鶴「韓国を迂回路に在日女性人は異人化する」、『図書新聞』一九八六年六月七日号、生瀬克己編『障害者と差別語』、明石書店、一九八六年より孫引き。傍点は花崎）

（注）宮迫千鶴：画家・エッセイスト（一九四七～二〇〇八年）。

この「新しいカテゴリー権利」とは、彼女が『ママハハ物語』で実践している自己命名権の行使のことである。それがすでにレッテルとして通行している「ママハハ」といったカテゴリーでも、自分で自分に名づけるカテゴリーとして採用し、独自の生き方を表現させるならば、差別の非対称の関係をひっくりかえす、すくなくとも相対化する、きっかけとなることができる。D

関係の非対称性を把握して対称性の関係をひらくことが反差別運動の原理である、と考えることにしよう。そうすると、反差別運動の意義は、これまでいわれてきた意味での「平等」の実現よりもさらに深く、ひろいことになる。近代の権利論の枠組での「平等」は、現在ある社会体制を前提としたうえでの不均衡や不利益の是正要求である。

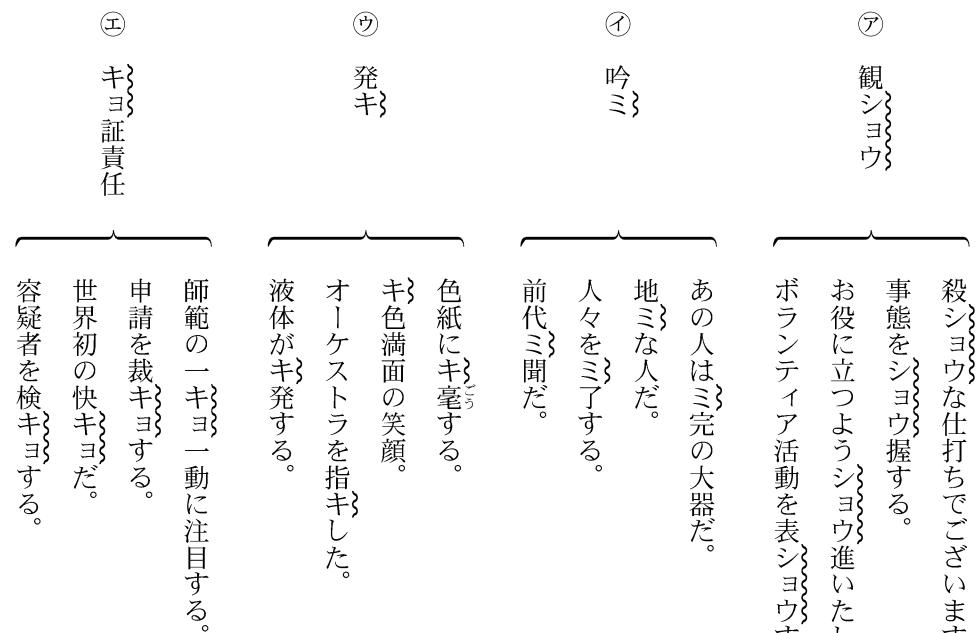
女性解放運動が、その初期に、男女平等を主張したときには、「反差別」と「平等」との関係はまだよく見えていなかつた。非対称の関係構造をそのままにした平等の要求は、結局、「男並み」というところへ回収される一方、市民権や労働能力を持たない者たちとの被差別という共通項を見えなくさせ、定住異民族や障害者の差別問題をおいてけぼりにすることで差別する者との共犯関係に入ってしまう。ウーマンリブからフェミニズムへとつづく運動が、従来の平等化要求の一面性を鋭くつき、それをのりこえて獲得したあたらしい地平はそこにある。^注田中美津はいった。「わかつてもらおうと思うは乞食の心」（『いのちの女たちへ——とり乱しウーマン・リブ編』、田畑書店、一九七二年、河出文庫、一九九二年）。関係の非対称性をみごとに衝いた一言である。E

（花崎皋平『増補 アイデンティティと共生の哲学』による。ただし一部変更した。）

（注）田中美津：一九七〇年代を中心に行なった女性解放運動で知られた代表的活動家（一九四三年）。

問一　波線ア～エのカタカナを漢字に直した場合と同じ漢字を用いるのが適切なものは、それぞれいくつあるか。その個数を算用数字（0～4）で答えよ。

国



問二

二重傍線 a～d の漢字の読みと、同じ読みに二重傍線部がなるものを次のの中からそれぞれ一つ選び、符号で答えよ。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| a | 論及 | ア | 窮境 | イ | 供養 | ウ | 嗅覚 | エ | 吉凶 | オ | 却下 |
| b | 黙殺 | ア | 勲功 | イ | 木魚 | ウ | 禁物 | エ | 朝貢 | オ | 墨守 |
| c | 迂回 | ア | 甲斐 | イ | 陥穽 | ウ | 委曲 | エ | 干支 | オ | 希有 |
| d | 乞食 | ア | 委嘱 | イ | 直訴 | ウ | 庶出 | エ | 殖産 | オ | 情緒 |

問三

空欄①・②に入るものの組み合わせとして最も適切なものを次のの中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア ① 健常者A ② 障害者B

- イ ① 男A ② 女B

- ウ ① 個人A ② 個人B

- エ ① 人間A ② 猿B

- オ ① 成人A ② 児童B

問四

空欄 I～V に入るものの組み合わせとして最も適切なものを次のの中から一つ選び、符号で答えよ。

ク	I	I	I	I	I	I	ア	I	無徴性	II	有徴性	III	有徴性	IV	普通名詞	V	固有名詞
キ	I	I	I	I	I	I	イ	I	無徴性	II	有徴性	III	無徴性	IV	固有名詞	V	普通名詞
有徴性	有徴性	有徴性	有徴性	無徴性	無徴性	無徴性	ウ	I	無徴性	II	有徴性	III	無徴性	IV	普通名詞	V	固有名詞
力	II	II	II	II	II	II	エ	I	無徴性	II	有徴性	III	無徴性	IV	普通名詞	V	固有名詞
才	無徴性	無徴性	無徴性	無徴性	無徴性	無徴性	オ	I	無徴性	II	有徴性	III	無徴性	IV	普通名詞	V	固有名詞
Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	工	Ⅰ	無徴性	Ⅱ	有徴性	Ⅲ	無徴性	Ⅳ	普通名詞	Ⅴ	固有名詞
Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	ウ	Ⅰ	無徴性	Ⅱ	有徴性	Ⅲ	無徴性	Ⅳ	普通名詞	Ⅴ	固有名詞
Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	エ	Ⅰ	無徴性	Ⅱ	有徴性	Ⅲ	無徴性	Ⅳ	普通名詞	Ⅴ	固有名詞
Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	オ	Ⅰ	無徴性	Ⅱ	有徴性	Ⅲ	無徴性	Ⅳ	普通名詞	Ⅴ	固有名詞
固有名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	力	Ⅰ	無徴性	Ⅱ	有徴性	Ⅲ	無徴性	Ⅳ	普通名詞	Ⅴ	固有名詞
V	V	V	V	V	V	V	才	Ⅰ	無徴性	Ⅱ	有徴性	Ⅲ	無徴性	Ⅳ	普通名詞	Ⅴ	固有名詞

問五 傍線 1

「私の批判の第一点」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 同一性と差異とが相互に排斥しあうにもかかわらず、菅孝行の人権論は、差異の固有性を肯定しながら同一性を根拠にしてしまうことで、論理的破綻に陥つていてること。

イ 「人間性一般」が普遍的であるにもかかわらず、菅孝行の人権論は、「人間なるもの」を否定しながら個の尊厳を根拠にしてしまうことで、倫理的破綻に陥つていてること。

ウ 差別と差異とが相互に前提しあうにもかかわらず、菅孝行の人権論は、非同一性を肯定しながら差異の固有性を根拠にしてしまうことで、論理的破綻に陥つていてること。

エ 個の差異の識別が要請されるにもかかわらず、菅孝行の人権論は、相互無関係性を肯定しながら「人間性一般」を根拠にしてしまうことで、論理的破綻に陥つていてること。

オ 同一性と差異とが相互に前提しあうにもかかわらず、菅孝行の人権論は、同一性を否定しながら差異の固有性を根拠にしてしまうことで、論理的破綻に陥つていてること。

問六 傍線 2 「パラダイム」とあるが、その一般的意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 主題 イ 反例 ウ 論理 エ 思考枠組 オ 機能 カ 相互関係

問七 傍線 3 「[同一性と差異] というカテゴリー設定そのものが、差別者・被差別者関係における差別者の意識と論理のワナである」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 社会では、いかなる者も「みなし認識」を行うべきではないのに、差別者がカテゴリー化作用を一方的に行うことで、差別の仕組みを見事に隠蔽するということ。

イ 差別者の設定する「同一性と差異」のカテゴリーを前提にして、被差別者に自らの特性を考えさせることで、差別の仕組みそのものを見えなくさせるということ。

ウ 差別の社会的装置が作用することから、差別者ばかりか被差別者も「人間性一般」を受け入れてしまうことで、るべき実在的差異が隠されてしまうということ。

エ 「同一性と差異」のカテゴリーを設定された側が「みなし認識」に無自覚なまま思考することで、価値づけられた差異を同一性として誤認してしまうこと。

オ 差別者の仕掛ける「差異」のカテゴリーを前提にして、被差別者に自らの固有性を考えさせることで、「同一性」への被差別者の同化を見えなくさせるということ。



問八

傍線4 「被差別の被命名、被分類性を逆手にとり、その構造を痛快に暴露した」とあるが、それはどういうことか。最も適切なものを次の
中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 血のつながらない母親を表わす呼称をあえて使用することで、自分の再婚的「同居」という独自の生き方を周囲の人々に認めさせたと
いうこと。

イ 「ママハハ」という言葉を義理の子に強いることで、「継子」を虐げる「意地の悪い男」を表わす言葉の欠落をその子自身に理解させた
ということ。

ウ 血のつながらない母親に用いられる差別的表現を自覚的に使うことで、差別の非対称の関係を相対化させる一つのきっかけを示したと
いうこと。

エ 血のつながらない子をもつ女性のみに使われる呼称を使用することで、自らが属する「ママハハ」集団の屈辱的同化を明らかにしたと
いうこと。

オ 血のつながらない母親のみを表わす差別的カテゴリーを自ら採用することで、女性解放運動での男女平等に内在する限界を暴露したと
いうこと。

問九

本文には次の一文が抜けている。この文が入るのに最も適切な箇所を文中のA～Eから一つ選び、符号で答えよ。
ここには差別を脱けだすひとつのたくみな知的術策がある。

問十

次のうち、本文の内容と合致するものを三つ選び、符号（ア～カの順）で答えよ。

- ア 差別の論理を根底から否認する人権論を菅孝行は主張するが、まぎりなりにも人権論である以上、「人間なるもの」が根拠にされるべきである。

- イ カテゴリカルな判断には偏見の可能性や現実性が内蔵されているが、人間社会はカテゴリー化作用を必ず伴うことになる。これが新保満の主張である。

- ウ 「能力」の差を差異として権利づけることは、「結果の平等」論で補正されたとしても、その「能力」の内容によって一定の人々を差別することになる。

- エ 江原由美子によれば、名づける側と名づけられる側、区分する者と区分される者との関係は、差別者と被差別者の差異を差別に読みかえる仕掛けである。

- オ 差別する側は、非対称の関係においては自分を名づける必要がない。したがって差別集団は、被差別集団から対称性の関係を要求されると、自分に適切な呼称がないことに気づく。

- カ 反差別運動の原理は、非対称な関係構造を把握し対称性の関係をひらくものであるが、近代の権利論の枠組での平等化要求は反差別運動を否定するものではない。

次の文章は、著者が「カッコいい」という概念について考究した著書の中で、「かわいい」をその比較対象として論じた文章である。著者は「カッコいい」を論じる際に「しびれる」という“体感”を特に重視している。これを読み、後の設問に答えよ。

「カッコいい」という価値観は、しばしば「男の美学」と理解されてきた。つまり、「男らしさ」こそが「カッコよさ」の根源である、と。

こんな発想は、今日では呆れられるだろうが、女性に対しても「カッコいい」という言葉が用いられるようになつたのは、さほど古い話ではなく、一般化したのは一九九〇年代以降だろう。

^a 旧ベイなジェンダーにまつわる偏見を、一旦受け容れた上で話を進めるならば、「カッコいい」という「男性的美／美德」と対比される「女性的美／美德」は、「かわいい」だつた。

今日でも、それが最も如実に表れているのは、子供のオモチャの世界である。

デパートなどのオモチャ売り場に行くと、乳児の玩具に関しては、かなりユニセックスで、全般的に「かわいい」と言えるが、アニメや特撮ものなどのキャラクター・グッズが増えてくる幼児期以降は、男の子のオモチャは「カッコいい」、女の子のオモチャは「かわいい」と分化してくる。

男の子のオモチャは、青や黒、金属的なシルヴァー、赤などが主体で、ヒーロー物の武器や変身アイテム、車や飛行機といった乗り物、昆虫や恐竜など、ゴツゴツした手触りのものが多い。対して、女の子のオモチャは、ピンクやライトブルーといったパステルカラーや白が主体で、丸みを帯びた、小動物的なキャラクターが目立ち、手触りはしばしばやわらかい。前者は例えば、「ウルトラマン」や「仮面ライダー」、後者は「キティちゃん」や「すみっこぐらし」などが典型だが、勿論、これはかなり大雑把な二分法で、「ドラえもん」のようにどちらとも言えないキャラクターのオモチャもあり、また「セーラームーン」のように「カッコいい」女の子向けのキャラクターも九〇年代以降は見られた。

それでも、子供自身が、いつの頃からか、男の子は「カッコよく」、女の子は「かわいく」なりたがるようになり、それが大人になるまで続いている。

当然、男の子のオモチャの勇壮さには、戦争のイメージの反映があり、歴史学者のアルノー・ボーベローによると、

例えば、フランスでオモチャのジエンダーが分化していったのは、大量生産によつて、男の子らしさ、女の子らしさがA していつた一九世紀末以降のことと、取り分け一八七〇年の普仏戦争の終結以降、大砲や軍装セットなどが増え、第一次大戦で更に顕著になつたといふ。

我々がよく知つてゐる興味深い事実として、子供は「美」にあまり関心を示さない。⁽²⁾ 五歳の子供を美術館に連れて行つて、ラファエロの絵の前に立たせたところ、感動に打ち震えて動けなくなつたなどと聞けば、誰もがその子に尋常でない才能を見出すことだろう。

崇高なものは、怖がるかもしれない。しかし、何かスゴいものには喜んで反応するし、ヘンなものも面白がる。しかし、すぐさまその価値がわから、夢中になるのはやはり「カッコいい」ものであり、「かわいい」ものであつて、それに関しては、さしたる「趣味の洗練」の訓練もない。

かくの如く、「カッコいい」と「かわいい」との違いは、混同しようがないほど明白だが、実際には、「かわいい」もまた、これまで「カッコいい」について見てきた性質を多分に有している。

若い女性が、カリスマ的な読者モデルのイヴェントに行つて、「かわいいーー」と歓声を上げる時、そこには「しびれる」ような生理的興奮があり、強い憧れの感情が搔き立てられてゐるだろう。

また、中学生の男子が、三年二組の○○ちゃんは「かわいい」と言う時には、女子が××君が「カッコいい」と言うのと同様に、美的に理想的だ、ということを意味していよう。但し、まさにそこに、「女性的理想像」と「男性的理想像」という違いがあるわけだが。

また、美や「カッコいい」と同様に、「かわいい」も非常に多様な意味を持つてゐる。「クール」は、「カッコいい」と訳されるという話をしたが、実のところ、文脈によつては「かわいい」と訳した方が適当なこともある。

近年の「かわいい」研究の先駆となつた『かわいい』論^b の中で、四方田犬彦は、女性誌の「かわいい」表象の細分化を分析し、十代後半の女性誌が、なぜ「かわいい」を表象する“モデル（人格）”を必要とするかについて考察している。「かわいい」だけでなく「かわいい」が必要だ、というわけだが、「重要なのはモデルの人格の実質ではなく、彼

女が人格として（休暇の、家族の、友情の）物語を生きているということである。物語こそが夢見られた同一化の対象なのだ。」と四方田は指摘する。一〇〇六年に刊行されたこの本での「かわいい」物語の消費が、今日、むしろ女性誌からインスタグラムやフェイスブックといったSNSに舞台を移しているのは周知の通りである。

「カッコいい」ものを発見するのは、言わば“自分探し”であると指摘したが、それは、「かわいい」に於いても同様だろう。しかし、お手本となる「カッコいい」あるいは「かわいい」ものや人は、多くの人にとつて必ずしも容易に見つかるわけではなく、それを教えてくれるガイドが必要となる。男性誌や女性誌の「カッコいい」、「かわいい」指^cナンは、本来、個人にとつての個性的な理想であつたはずの「カッコいい」、「かわいい」を□Aする。メディアのこの機能が、流行の形成に大きな役割を担つていることは言うまでもない。

四方田は、「かわいい」の語源を「顔映ゆし」に遡り、その語誌を確認しつつ、今日のこの語の多義性を次のように列キヨする。

「小さなもの。どこかしら懐かしく感じられるもの。守つてあげないとたやすく壊れてしまうかもしれないほど、脆弱で儂げなもの。どこかしらロマンティックで人をあてどない夢想の世界へと連れ去つてしまふ力をもつたもの。愛らしく、綺麗なもの。眺めているだけで愛くるしい感情で心がいっぱいになつてしまふもの。不思議なもの。たやすく手が届くところにありながらも、どこかに謎を秘めたもの。」

私たちは、ここに更に、明るいもの、健康的なもの、パツとしているもの、癒されるもの、……と更に幾らでも付け加えることが出来ようが、その理由は、「カッコいい」と同様に、これらに触れた「経験する自己」^{③A}の生理的興奮を、「物語する自己」^{③B}が「かわいい」という言葉に一元的に回収してしまつたからである。結果、再びその「かわいい」が何だつたのか、ニュアンスの違いを説明するために、「キモかわいい」だの「エロかわいい」だのと、□Bされた造語が生まれていった。

「カッコいい」との対比で注目すべきは、「懐かしさ」が挙げられている点である。幼い、か弱い存在に対し抱く「かわいい」という感覺には、なるほど、自分がそうなりたいというより、自分もそうだったという幼少期の自己の追体験という一面がありそうである。

その意味では、憧れの存在に、自分の“未来”を重ねようとする「カッコいい」に対して、「かわいい」は“過去”を

見ている、ということになろうか？しかし、ファッショントマのモデルへの憧れは、「かわいい」であっても、やはり理想的な将来像と考えるべきだろう。

四方田は、『枕草子』にまで遡る「かわいい」ものを愛する日本的な感性を指摘しつつ、今日の世界的な「Kawaii」ブームを、「日本文化に深く根ざした特殊なものであるがゆえに珍dチヨウされる」のか、「それとも世界中の人間が享受し得る、ある種の文明的普遍性をもつてている」のか問うてはいる。勿論、メイド・イン・ジャパンの「Kawaii」文化は、近代化以降の欧米文化とのハイブリッドの産物であり、しかも、それがタクミであつたと云ふと自体も、今日のアジアを見る限り、必ずしも日本に特殊とは言えない。

また、^④文化的に「無臭化」されたことで、日本的な「かわいい」がグローバル化されたようでいて、実際は、やはり「日本的なものとして享受されているのではないか？」あるいは、それは各国のローカルな「かわいい」感性を刺激したのか、と、幾つかの視点を紹介しつつ、結論は留保されている。

同様に、「かわいい」を「日本的」と言えるのかどうかという疑問については、『幼さ』という戦略「かわいい」と成熟の物語作法』で英文学者阿部公彦まさひろも指摘してはいる。

阿部は更に、「かわいい」の英訳がcuteやこののかどうかを検討しつつ、「英語でcuteという語を女性に対して使う」と、どうしても見下すようなユアンスが入りこむ」とし、同様の事態は「かわいい」に関してもシヨウじ得るとしている。「たとえば男性に対して女性が『かわいい人ね』と言えば、『考え方がわかりやすい』『単純』といった含みが入り得るだろうし（だからといってそこに好意がないとも言い切れないが）、女性に対してでも、仕事に邁進cしている最中の女性に「かわいいね」と声をかければ、どこか相手の勤務態度の足をひっぱるような敬意を欠いた発言に聞こえる可能性がある。場合によつてはセクハラととられかねない。」

つまり、「かわいい」は「カッコいい」同様に、憧れの対象に向けられる言葉ではあるが、「カッコいい」と違つて、状況によつてはじい」となく小馬鹿にした意味にもなり得る、ということである。それは「かわいい」の中でも、恋愛対象、性的対象、庇護対象として、男性の側から発せられる「かわいい」であつて、いずれも職場という環境では不適切に違いない。「カッコいい」にあつて「かわいい」にない最も重要な違いは、「戦い」のイメージである。「カッコいい」存在は何かと戦つ

て打ち勝とうとするが、「かわいい」存在は刃向かわないイメージで、しばしば自立しておらず、庇護を必要とする。だからこそ、一九九〇年代以降、女性の社会進出とともに、「かわいい」ではなく、女性にとっての「カッコいい」が求められることとなつたのだつた。

(平野啓一郎『「カッコいい」とは何か』による。ただし一部変更した。)

問一 波線 a ~ e のカタカナを漢字に直した場合と同じ漢字を含むものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、符号で答えよ。

- | | |
|---|--|
| a 旧ヘイ
オ
ウ
イ
ア
ナン 戸を開ける | b 先ガケ
オ
ウ
イ
ア
チョウウ 陽の節句 |
| c 指ナン
オ
ウ
イ
ア
ナン 老若ナン女を問わない | d 珍チヨウ
オ
ウ
イ
ア
チョウウ 前の口を利く |
| e タクみ
オ
ウ
イ
ア
ナン 映画界の巨ジヨウ | e タクみ
オ
ウ
イ
ア
ナン 自宅にナン禁された |
| エ
ウ
イ
ア
ナン 自動車の製造コウ程 | エ
ウ
イ
ア
ナン 無ナンな服装をする |
| エ
ウ
イ
ア
ナン 極を目指す | エ
ウ
イ
ア
ナン 世界記録にチヨウ戦する |
| エ
ウ
イ
ア
ナン すぐれたギ量の持ち主 | エ
ウ
イ
ア
ナン 一チヨウにして滅亡する |
| エ
ウ
イ
ア
ナン 海外進出をキ図する | |

問二 波線 A → C の漢字の読みをひらがなで答えよ。

問三 二箇所の空欄 A には同じ言葉が入る。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 定着 イ 拡大 ウ 並行 エ 二極化 オ 画一化

問四 空欄 B に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 細分化 イ 体系化 ウ 同一化 エ 二分化 オ 抽象化

問五 傍線 ①「大雑把な二分法」とあるが、(A) 何と (B) 何に二分することを指しているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア (A) 男性に対して用いられる「カッコいい」と (B) 女性に対して用いられる「カッコいい」
イ (A) 「男性的美／美德」と (B) 「女性的美／美德」

ウ (A) 乳児の玩具と (B) 幼児期以降の玩具

エ (A) 「カッコいい」男の子のオモチャと (B) 「かわいい」女の子のオモチャ

オ (A) 「ウルトラマン」や「仮面ライダー」と (B) 「キティちゃん」や「すみっこぐらし」

問六 傍線 ②「子供は「美」にあまり関心を示さない」とあるが、それはなぜだと考えられるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で

答えよ。

ア 人は「美」に対して「しひれる」ことはないから。

イ 子供は「美」を理解するための訓練を積んでいないから。

ウ 「美」には多義性がなく、文化的普遍性を持ったものだから。

エ 「美」は、男性的な美德と女性的な美德のどちらでもないから。

オ 子供のオモチャは「カッコいい」ものと「かわいい」ものばかりだから。

問七 傍線③A 「経験する自己」、傍線③B 「物語る自己」 とあるが、これらはそれぞれどのような意味か。最も適切なものを次のの中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 「経験する自己」とは、カリスマ的なモデルのイベントを楽しむ自己のことであり、「物語る自己」とは、そのモデルの人格に付随する物語を必要とする自己のことである。

イ 「経験する自己」とは、あるものに接して夢中になるほど心惹かれるようになる自己のことであり、「物語る自己」とは、その感動を言語化しようとする自己のことである。

ウ 「経験する自己」とは、理想的な物語の中で生きていると想像する自己のことであり、「物語る自己」とは、その物語をSNSなどで外部に表現する自己のことである。

エ 「経験する自己」とは、心惹かれるものに対し多様な表現を付与する自己のことであり、「物語る自己」とは、それをひとつずつ言葉に回収してしまう自己のことである。

オ 「経験する自己」とは、カリスマモデルのイベントを行ったことをインスタグラムに投稿する自己のことであり、「物語る自己」とは、それに触発されて自らも読者モデルを目指そうとする自己のことである。

問八 傍線④ 「文化的に「無臭化」された」とあるが、これはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次のの中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 日本の近代化とともに、前近代的な古臭さが抜け、新鮮なものとして受け取られるようになったということ。

イ 各国のローカルな感性を持つ強い個性によって、日本的な個性がかき消されたということ。

ウ 日本で作られたものでありますながら、世界中からの受容の抵抗を受けることが少ないものになつたということ。

エ 世界中に発信するためにデジタル・コンテンツ化されたことで、アナログの持つ手触りや匂いが失われたということ。

オ それぞれの理想像という個人的な価値の領域を超えて、全人類的で普遍的な価値を持つようになつたということ。

問九

次のうち、本文の内容に合致するものにはアを、合致しないものにはイを答えよ。

- ① 「男らしさ」こそが「カッコよさ」の根源であるという考え方には、ジェンダーにまつわる偏見が含まれていると著者は考えている。
- ② 子供は「かわいい」ものの価値を理解しているが、十代後半になるとその感性を失ってしまうので、「かわいい」ものの発見のために女性誌などから学ぶ必要が出てくる。
- ③ かつてはいかなる文化においても子供の玩具の特徴はジェンダーで明確に二分されていたが、一九九〇年代以降の日本では、女の子のオモチャに「かわいい」もの以外が現れ始めた。
- ④ 「カッコいい」と「かわいい」は明確に区別できるが、語の意味する範囲が多様であることや、未来の理想像を表現する点など、共通点も多い。
- ⑤ 「Kawaii」文化は近代化以降に欧米文化と融合することによって成立したが、このような融合現象は、日本的な感性による日本独特のものである。
- ⑥ 「かわいい」という語は常に好意的に用いられるが、状況によってはその対象に対して、敬意を欠いたニュアンスを含んでしまうことがある。
- ⑦ 女性の社会進出とともに、「かわいい」という語に“戦い”的なイメージが与えられるようになった。